

琵琶湖を俯瞰しながら

いのこやま きぬがさやま 近江の低山(猪子山~ 繖山)を歩く

車を運転しなくなった高齢者にとって、登山口までのアプローチは大きな問題。各地でバスの便数が減り、タクシーの予約もままならなくなった現在、悩ましい難題となった。

駅からすぐの登山口

今回、鉄道駅の近くに登山口がある滋賀県の猪子山に登ろうと思いたち、6月7日8時44分JR東海道線能登川駅に降り立った。

駅前の周辺地図の前で登山装備の中年女性3人のグループと出会い、「どこに登るのか」と尋ねると「猪子山から繖山に縦走する」と言う。未知の山を歩くのに、同じコースを歩く人がいるのは心強い。しかし、私がストックの準備をしている間に彼女らは出発し、たちまち見えなくなった。



親切な青年に案内されて

開店準備中のピザ屋さんに道を尋ねると、店長さんが「ご案内しましょう」と言って私のノロノロ歩きに付き添ってくれる。よほど危なっかしく見えたのだろう。恐縮する私に「私も最近奈良から引っ越してきたので」と自己紹介し「この山は結構きついですよ」などと言いつつ

↑ **ガンピの花** 登山口の見える場所まで案内してくれた。30歳、190cmの長身。さわやかな青年だった。

整備された丸太作りの道

9時に登山口着。ここで件の女性グループと再会。揃って丸太づくりの階段を登り始める。

間もなく上山天満天神社に到着、社殿の横にはタツナミソウがたくさん咲いているが女性たちは花には関心が薄いようだ。



林の中の猪子山山頂

さらに登り、9時30分分岐に出た。ここが稜線の縦走路らしい。「繖山は右ですよ」と教えてくれて、女性たちは左に歩き始めた。私は右側に進んだが、琵琶湖の見える展望所の地図で、猪子山山頂が女性たちの進んだ方にあることに気づき、引き返して9時48分猪子山山頂着。標高267.5m。雑木林の中の何もない頂上。

いくつもの小ピークを越えて

ターンして縦走路を南西に進む。道はよく整備されており、路傍にはツルアリドオシ、ツツジ、オカトラノオ、ガンピなどが花を見せ、林の中ではネジキやソヨゴの花が登山道に散り敷かれている。ホトトギスの啼き声が切れ目なく響いてくる。

何回かのアップダウンを経て、11時石馬寺分岐を通

↓ ササユリ

過、やがて鞍部にあたる地獄越を過ぎて、繖山への登りにかかる。ササユリが目立つが、一本一本支柱が添えられており、地元で大切にされていることがよく分かる。

眼下にひろがる琵琶湖と水郷の景観

展望の開けた岩場で、昼食を摂っていると、女性3人組もやってきた。眼下にひろがる琵琶湖と田園風景、

↑ 地獄越のお地藏さん

その中を横切る東海道在来線や道路、内湖(ないこ)と呼ばれる小型の湖など水郷地帯らしい情景に心癒される思いがする。女性たちは思い思いの格好・角度で写真を撮り、「お先





に」と先に出かけた。

↑縦走途中での眺望、琵琶湖の手前に見える池沼が「伊庭内湖」

初夏の花咲く下山路

12時30分織山山頂着。標高432m。「また追いつかれたー」との声、女性たちが弁当を開いていたのだ。

頂上の片隅にガンピの群れが花を見せており、この植物についての会話を交わした後、下り道を訊いて先に下り始めた。コアジサイ、ササユリ、タツナミソウなどの花を楽しみながら歩き、13時40分「安土文芸の郷公園」着。構内の池ではヒツジグサ(スイレン科)が真っ白な花を開いていた。なるほど名前通り(羊の刻は午後2時)に開花するのだと感心してカメラにおさめた。



↑コアジサイ

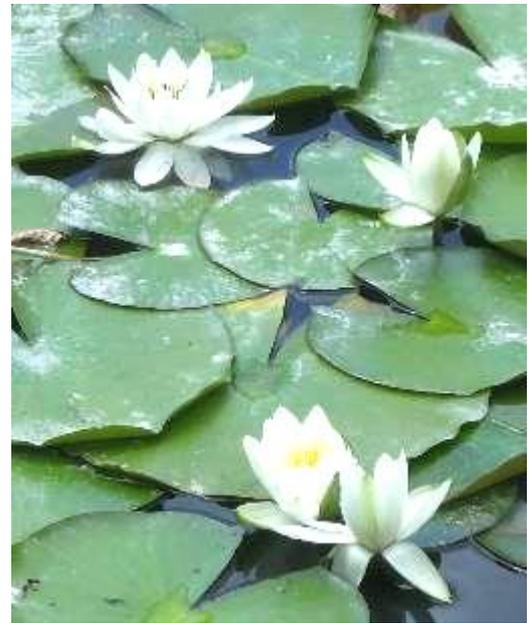
ここでもありがたい親切・そして激励

公園から安土駅まで舗装路を歩いた。

早苗田を渡ってくる風は涼しいが、路面からの照り返しが厳しい。途中、高齢の男性に道を問うと「同じ方向ですから」と歩調まで合わせて同行してくれた。湖国の人たちの親切に、また、また感謝。

その人は初対面の私に「裏金問題での自民党の横暴・腐敗」への怒り、その自民党を助けた公明党、維新への不満を、静かな口調ながら話し、「国民がもっと怒るべきだ」と強調した。聞き手に回った私だったが、賛同の意を表して途中で別れた。疲れも暑気も吹き払う何よりの励みだった。14時20分東海道線安土駅着。

ヒツジグサ→



読めなかった織の字

ルビのふってないこの山名を見た時、恥ずかしながら読めなかった。「きぬがさ」と読むのだ。

漢和辞典で「織」をひくと「サン。①かさ。絹がさ ②雨がさ」とあった。次いで広辞苑で「きぬがさ」を見ると「衣笠、絹傘、華蓋 ①絹で張った長柄の傘---公家などの行列にさしかざす---、②天蓋」と書かれていた。

↓二上山のキヌガサタケ

この山の別名は「観音寺山」

滋賀県のこの山には西国32番札所の観音正寺があり、山の別名も「観音寺山」だから、山名の「織」は広辞苑②の天蓋=仏菩薩像の上にかざすきぬがさ(広辞苑)に由来すると考えるのが妥当かと思われるがどうだろうか。

キヌガサソウとキヌガサタケ

広辞苑には関連語として「キヌガサソウ」と「キヌガサタケ」とが載っていた。両方とも山歩きする者にはなじみ深い名前だ。前者は白馬岳・大雪溪手前の群落を思いだす。その花の形から見て広辞苑①からの連想での命名だろう。

後者のキヌガサタケはキノコの女王と称される美しい姿(写真左)を、ここ連日、二上山の林道の傍らの竹林に現わして登山者を喜ばせている。こちらは 上記広辞苑②に由来する命名。登山しない人でも見られる場所なので、関心ある方には一見をお勧めしたい。但し採取は厳禁。

